

県医師会の動き

副会長 吉本 正博

5月14日(日)に行われた生涯研修セミナーの講演の中で、琉球大学の益崎裕章教授はGoogleが開発中のスマートコンタクトレンズの紹介をされました。これは涙に含まれる糖の値を測定し無線で送信する機能を持ったコンタクトレンズです。糖尿病患者が自己の血糖を管理し、医療機関と協働して治療に当たることができる画期的な技術ですが、Googleは個人向けに遺伝子解析サービスを実施しており、さらに、別のウェアラブルなどのセンサーを用いて測定した心拍数、心拍リズム、血中酸素濃度等のデータを、個人名が特定できない形で集積し、得られたビッグデータを解析することで、疾病に対するバイオマーカーを特定したいとの考えのようです。今でもスマートフォンに搭載されたGPSで持ち主の居る場所(あるいは移動した場所)が特定され、街中に張り巡らされた防犯カメラでそれを確認することができます。今後はさらに身体内の情報も取得されるわけです。「どこで何を見て心拍数が上がったのか」ということを他人が知る時代が来るのです。一億総活躍社会ならぬ一億総監視(丸裸)社会、怖いですね。

第179回山口県医師会臨時代議員会が4月20日(木)に開催されました。議題は平成28年度第25回理事会で承認された平成29年度予算と事業計画の報告でした。また、下関市医師会から2題の質問・要望が提出され、執行部から回答が行われました。詳細については本号をご参照ください。

4月26日(水)、厚生労働省において**地域医療介護総合確保基金(医療分)**についての国のヒ

アリングがあり、山口県健康福祉部医療政策課、山口県歯科医師会、山口県看護協会の役員、本会からは弘山直滋常任理事が参加しました。県の予算が厳しいため、平成29年度の要望額は13.2億円(平成28年度の要望額は22.6億円で内示額は20億円)となっています。山口県の高齢化率は32.3%と全国第4位であり、高齢化の進行が全国に比べ約10年早いこと、平成10年から平成26年の間の医師数の増加率が7.1%(全国46位)と著しく低く、特にその間の45歳未満の医師の減少率が23.9%で全国6位となっており、減少がきわめて顕著であること、看護学生の県内就業率が62.5%(全国42位)と低いことから、医療人材の確保と在宅医療の推進が喫緊の課題であると説明し、在宅医療提供体制構築事業、医師確保対策強化事業に係る計画事業費の確保と、看護師等養成事業に係る計画事業費の増額を要望したそうです。

4月27日(木)には本年度第1回の**有床診療所部会役員会**が開催されました。来年7月に第31回全国有床診療所連絡協議会総会を山口県医師会の引受けで開催することが決まっており、そのプログラム等についての検討が行われました。今後も頻回に役員会が開催され内容を詰めていくことになります。

5月10日(水)に開催された**都道府県医師会勤務医担当事務連絡協議会**には加藤智栄常任理事が出席しました。新たな専門医制度の仕組み、医療事故調査制度(事故調)について協議が行われたそうですが、いろいろと議論があり先送りされていた専門医制度は来年から間違いなく施

行されるとのことです。また、事故調の支援団体等連絡協議会運営事業が日医に委託（予算額 約 9,200 万円）されることとなり、一都道府県あたり 100 ～ 200 万円の支援が行われるとのことでした。今まで県医師会の持ち出しであったので、当然とはいえ、本会としては助かります。

5 月 11 日（木）の理事会の後、山口県健康福祉部・山口県医師会懇話会を開催しました。河村康明 県医師会長と岡 紳爾 健康福祉部長の挨拶の後、平成 29 年度の健康福祉部の事業についての説明がありました。県の財政が厳しいこともあり、特に大きな新規事業はないようですが、子育て支援、地域包括ケアシステム構築に重点が置かれているなどという印象を持ちました。その後の協議では県医師会から、地域医療介護情報ネットワークの運用や更新時の補助、僻地の高齢者の足の確保、訪問看護ステーションの拡充、看護師確保対策、看護教員養成講習会の開催について質問、要望を行いました。

第 144 回山口県医師会生涯研修セミナーが 5 月 14 日（日）に開催されました。今回は午前中に新たに山口大学医学部教授に着任された木村和博 眼科学講座教授と下村 裕 皮膚科学講座教授の講演、午後には山口大学出身でこの度、川崎医科大学消化器外科学教授に着任された上野富雄 教授と、琉球大学内分泌代謝・血液・膠原病内科学講座の益崎裕章 教授の講演がありました。上野教授が昭和 63 年卒、他の 3 人の教授は皆、平成になってからの卒業と若く、はつらつとした先生

方で今後のご活躍が期待されます。

50 数年間クラシック音楽を聴いていて、気に入っている指揮者の中にハンガリー生まれの指揮者が結構いることに気づきました。アントル・ドラティ、アダム・フィッシャー、フェレンツ・フリッチャイ、ヤーノシュ・フェレンチュク、フリッツ・ライナー、ジョージ・セル、イシュトヴァン・ケルテス、ユージン・オーマンディ、シャンドル・ヴェーグです。この中でオーマンディについては過去に触れたことがあります。ケルテスは事故により 43 歳で、フリッチャイは白血病のため 48 歳で亡くなりました。二人とも名指揮者として知られ、年齢の割には多くの録音を残しており、将来を嘱望されていました。ライナーは 1953 年から 1963 年にかけてシカゴ交響楽団の音楽監督として多数の録音を残しています。特に親交のあったバルトークと、リシャルト・シュトラウスは今でも名盤の誉れが高く、私も購入した廉価版 LP を繰り返し聴いたものです。ドラティとフィッシャーはともにハイドンの交響曲全曲録音を行っています。かつてハンガリーはオーストリア帝国の一部だったことが関係あるのでしょうか、バルトーク、コダーイ、リストといったハンガリー生まれの作曲家だけでなく、モーツァルト、ベートーヴェン等ウィーンゆかりの作曲家の曲も得意としている音楽家が多いようです。ヴェーグが指揮したモーツァルトのセレナード&ディヴェルティメント集も私のお気に入りの CD です。

かなえない 未来がある。





応援してください。
やまぎんも、私も。

石川 佳純



山口銀行

YAMAGUCHI BANK